

אָמַרְתִּי לְפָנֶיךָ יְהוָה אֱלֹהֵינוּ וְאֶת-
שְׁמָךְךָ נִזְבְּחֶנּוּ



Satzgeistes

drawn by Lin Changshen

Publ. on 2011.7.20h

サテュロス

サテュロス住む黒い森
グロテスクな股下に
ギリシャの顔の美しさ
角は、ねじれ曲がっても
飛ぶツグミより純粹で
ふだんは椎の実をかじる

細い弓持ちサテュロスは
小鳥を追いかけ花を射る
ポコポコなる足音に
モズが遊びをしけけ
カケスはカワセミをしかける
器用な狩人は
カケスのみを射て
快活に笑う

葉で作った杯を持ち
光とガラスが満る泉へ
泉にふさわしい透明な乙女が
声を出さずに泣いていた
泣きじゃくる先客にサテュロスは
人は泉の水を飲み
かさを減らすが
増やす人間は初めてだ
乙女は顔を上げると
サチュロスの股下に顔をしかめるが
気のきいた言葉に眉を下げる

父が定めた掟では
たくましい街の若者たちが
町から離れた山の頂
聖人の警句が縫い取りされた
旗を持って戻った者に
父の娘と結婚させる
父の娘とはすなわち私で

かけっここの景品にされてしまう

町一番の俊足は
私の嫌いなシュミワーズ
醜い顔にいやしい性根
足は嫌なにおいを放ち
シャツには赤い毛玉

私の行き場は
天国しかないと
泣きじゃくる
哀れに思ったサテュロスは
安心おしと
娘に一計を
娘は泣きやみ
指にはめた指輪を渡すと
金を好まぬサテュロスは
眉をしかめて追い返す

街がにぎわい騒ぐ日に
若者たちはあたりをにらむ
足には牛の油を塗り
腰に巻いた麻布には
固いメレモンをつるす
舌を焼く酸い汁は
渴きを沈め
怒りを走らせ
とにかく
かけっこには向いていると
親はこぞって持たせる

競争が始まる広場の前に
シュミワーズは汚い脛をむき出しに
乙女に片目をつぶって見せる
顔をそむけると
広場に落ちたシーツを見つめ
ため息ついて
サテュロスを探す

教会の鐘が時を告げると
男達は山を目指して駆ける
乙女は小さく悲鳴を上げ
自分をあきらめる

悲鳴を上げたのは乙女だけではなく
老若男女の唇から
情けない音がこぼれる

広場に落ちたシーツが
目が追いつかないまま
山を目指す

つばを飲み込む暇があればそ
明日か今日やら解らぬままに
汚いシュミワーズを引きずって
旗を絡めた白布が
広場目指して飛んでくる

はたと
乙女は微笑みを

オリーブの冠を手に
シーツを迎えて
シュミワーズを引きずったまま
シーツからのぞいた顔は
ギリシャの美丈夫
旗を乙女に渡すと
冠に唇を受け取る
美しい顔持つシーツに
街びとは花を射る
シュミワーズが好かない父親は
胸をなでおろし
婿を迎えて広場に降りる

怒り狂ったシュミワーズ

隠し持った短剣で
シーツをさっと払うと
目にしたのは
山羊の足

街人は
乙女の制止も聞かず
それぞれ何かを手にし
サチュロスを追いかける

シュミワーズ蹴飛ばし乙女は叫ぶ
あの旗もつ獣と結婚するの

サチュロスは旗をその手に
森に逃げ帰る
乙女に笑みを残し

ぼくぼく響く街道には
グロテスクな股下
ギリシャの顔もつサチュロスが
旗を掲げ
勝利をこぼす

グランドルール

打たせた槌もそのままに
足を大地に預ける
地面に食い込む植物を
細かい根をちぎるように
空にさらす
麦より小さい砂くれが
星より多く集まって
鬼より強い舞台ができる
泣き、わめき、殺したとして、
明けに染めるだけで
鍬であばたを残すのみ
身を震わし
海を支え
眉をひそめ
星となる

水草

揺れる水面の思いを詰めた
肌にまとわり
髪に結いつく
甲高い声をあげても
ここは水の下
揚げても腐った草に
弁論の機会はなく
地表を追われた悪魔が
糧を得んと
泉のそこで育てた草だと
山型帽被る医者がいい
年よりも賛同し
時たま、
流れてくる乙女を
そっと抱き寄せ
わずかに残ったぬくもりを
確かめるほかに
楽しみはなく
風よりも冷えた
悲しい空気を
胸一杯に吸い込んで
今日も太陽にあらがう

指輪

小さな金の細工に
人生を写され
立場を明らかに
憎らしい輪は
処女でないことを示し
恋の邪魔をする
体は違う花を摘むことを許されず
心が歌を歌えない
同じ番を持ち
それが双子であればまだしも
他人であるのだから
手が醜く老いても
美しい今まで
若さを見せびらかせる
光さえ差すことのない部屋の中で
指を締め付け主張する
お前は俺のものだと

保持されることは
一時の喜びを生むが
いずれ
服でさえ変わるもの
そばに立つ男が
変わらないというのは
この指の飾のせい

光を映し
シーツの持ち主を写し

9月の太陽に
指を突っ込む
あわててあたりを見渡すと
カササギがこちらをにらみ
泡を飛ばし抗議する

私は指輪のものなのか
指輪が私のものなのか
2つとも男のものなのか
わからないまま

年をとり
浮ついた心を捨て
男が死ぬと
2枚の金貨に換える
なにもない手を見ると
過ぎ去ったもののみが
思い出され
取り返しに
3枚の金貨を持ち
家を飛び出す

サンバル通りの音

町一杯に響くサンバル通りの音
窓を開けてご覧
規則正しく機織る音が
働き者の歌が
洗濯を干し歌い
花に水をやり歌う
赤子をあやす母の歌が
そこでは水差しもメロディを奏で
卵も手拍子する
幸せは音ではないけれど
心浮き立つ物音に
足を止める人はない
靴音止めばリズムが絶え
楽しみ減ってしまうから
サンバル通りの音は皆
気づかぬふりして笑みをもらし
通り過ぎる刹那にサンバル通りの
人々の生活をうらやんで
悔し紛れに唇を
ひゅっと音だし抗議する